

フェリー就航の可能性を調査

2023. 8. 13

村上かずしげ通信
発行 共産党市議団
電話 0154-23-5212

釧路港へのフェリー就航を目指しての貨物に関する調査がまとまり、市議会に報告されました。

◆道内の主要港の年間のフェリー貨物取扱量

苫小牧港	5,778 万トン
小樽港	1,147 万トン
函館港	2,210 万トン

◆東北北海道地域の貨物でフェリーを使っている量

(釧根、十勝、オホーツクの貨物で苫小牧・小樽・函館などのフェリーを利用)

十勝圏の貨物	713 万トン
北網	234 万トン
釧路	210 万トン
根室	47 万トン
遠紋	29 万トン
合計	1,233 万トン

内訳 移出 996 万トン 移入 237 万トン

ひがし北海道全体で見れば、潜在的なフェリー貨物はかなりあります。この多くが陸送され苫小牧港でフェリーに積み込まれています。十勝やオホーツクの分も含め、これらの貨物を釧路港に集約できるか？ここがフェリー就航の最初のハードルです。「どのくらいの貨物量で採算に見合うのか」と質問しましたが、フェリーの便数と船の大きさによるので、確かなことは言えないという答弁でした。



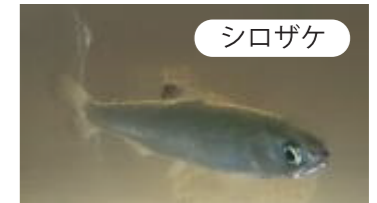
やっぱり貨物は十勝が圧倒的に多く、東北北海道全体の 58% も占めている。十勝の農業とどう連携できるかだね。



- フェリーの就航には、観光客よりも採算がとれる貨物量の確保が大切。
- 貨物の 8 割が移出で、移入が移出の 1/4 しかないため、釧路に就航したとしても、釧路に戻ってくる便は貨物が足りないことになる。船会社は 7 割ぐらいの貨物を積まないといけないという意見。
- 移出も農産物が多いため、季節の変動幅が大きいのも課題となっている。

倉庫 1 棟をつかっただけの実験施設で、あまり大きなものでないことも再認識しました。

日本製紙工場跡地を使った陸上養殖実験施設を見学しました



①実証実験の経過

- 2022 年 12 月 22 日 発眼卵を孵化水槽へ投入
- 2022 年 12 月 27 日 孵化開始
- 2023 年 01 月 10 日 孵化完了 (1650 匹)
- 2023 年 02 月 08 日 育成水槽へ移す
- 2023 年 04 月 13 日 日本製紙工場内の実証実験水槽へ移動 (800 匹)

※800 匹ほどが 6 月中旬には、体長 16 センチメートル、30 グラム程度に成長していました。

②完全陸上養殖の特徴

- 釧路市ではシロザケの養殖を行っています。来年の 3 月ころ、1 キロになったころの初出荷を予定しています。
- この施設は実証実験です。商業ベースに乗せた場合には、シロザケに限定せず通年の育成と出荷を行うこととなります。
- 完全閉鎖型の陸上養殖で、水は水道水、水の入れ替えは行っていません。河川水などを使っていないので、河川水に混じっているウイルスや成分が混入することなく、安定した水質を保っています。高度な水質浄化システムが働いています。
- 水槽の大きさは 6 メートルです。餌の色素が溶け込み茶色の水になっています。
- 冬季は水が凍らないように暖房を使っていますが、それ以外の室温管理はしていません。水温は 16 度程度に保っています。